

朝を  
ひらく

無意識からくる行動は面白く、また怖い。以前娘の小学校時代、PTA総会後の締めのおいさつで、家具屋さんをしていた副会長のY氏が「今日はお忙しい中、ご来店本当にありがとうございます。ありがとうございました……?!」。会場のクスクス笑いは続いたが、彼は最後まで気づくことはなかった。

さて次のストーリーはちょっと怖いもの。結婚式を1カ月後に控えるE氏、還暦を過ぎてからの再婚である。仏式結婚に使う新婦用の数珠を仏具店に注文し、その日は品物が届く日であった。

## 無意識のちから

永田 円了  
真国寺住職



ピンポン、玄関の呼び鈴が鳴った。いつもの仏具店の方である。どうぞ、と玄関上がり口の部屋に招き入れる。婚約者に数珠を選んでもらおうと、彼女の名を呼んだ、「みち子、みち子(仮名)」と2度大きな声で。数秒後ハッと気がつく。アッ、これは10年前に旅立った亡き妻の名前。冷や汗が首筋から胸元に垂れる。

台所にいる彼女に聞こえていないことを願う。しかし時はお遅かった。彼女はE氏に目を合わせることなく、うつむいて腹の底から絞り出すような声で言った。「わたしはみち子ではありません!」

E氏とは、私自身のことである。僧侶として人のための祈りを何年もしてこるも、その時ほど真剣に自分自身のために神仏に祈ったことはなかった。大切な人を傷つけたという自責の念と後悔で、身体中が硬直した。

そののちの修羅場は想像におまかせする。それまでの快晴が瞬時にして雷雨に変わる。無意識からくる言動は、かくも怖いものなのである。

意識と無意識、氷山でいうなら水面上と水面下の部分。意識は小さな氷山の一角、人間の行動の95%は、水面下の無意識に操られていると最新の脳科学は言う。

無意識の悪夢から1カ月、山谷をなんとか乗り越え、ささやかな結婚式を迎えた。書道を教える妻が、式次第を大きく毛筆で書いた。本堂の壁に貼り付けられた式次第を見てハッとした。親族が、「新族」となっている。すぐに彼女を本堂に呼び間違いを指摘するが、なかなか気づかない。彼女も無意識にそう書いたものであった。

あっ、これはもしかしたら無意識界からの贈り物ではないのか。結婚する当人は2人だが、それでつながる2組の親族は、新しい家族の輪となっていく「新族」。式次第は訂正することなく結婚式は滞りなく終了した。

## 面白くまた怖いもの